

博多とアジアの映画 119

松浦 仁

1986(昭和61)年4月、「靈幻道士」(1985)が日本(福岡)で公開された。靈幻道士(原題は殭屍先生、英題はMr. Vampire)は1985年に製作された香港映画で中国・清王朝の時代を舞台に中国の死体怪物(あるいは吸血ゾンビ)(キョンシー)と(キョンシー)退治の専門家である靈幻道士との死闘を描いたチャイニーズ・アクション・ホラー・コメディだった。

「靈幻道士」のエグゼキュティブ・プロデューサーであるサモ・ハン・キンポーは、自身が製作した靈幻道士元祖シリーズ(サモ・ハン・ホラー3部作)、「妖術秘伝 鬼打鬼」(1980、原題は鬼打鬼、サモ・ハン・キンポーは監督・共同脚本・撮影・主演を兼任)「靈幻師弟人嚇人」(1982、原題は人嚇人、サモ・ハン・キンポーは共同脚本・主演を兼任)「靈幻百鬼人嚇鬼」(1984、原題は人嚇鬼、サモ・ハン・キンポーは監督・共同脚本・撮影・主演を兼任)をもとにして1985年に「靈幻道士」を製作した。「靈幻道士」は、ホラー映画にコミカルな要素を取り入れた(キョンシー・ホラー)とよばれる新ジャンルを確立する第1作目であり、コミカルなホラーとして瞬く間に人気となり、とくに日本をはじめ東アジア圏で大ヒットシリーズ化された。(靈幻道士シリーズ)

は香港映画の定番として続編の製作が続けられている。(靈幻道士シリーズ)は以下のとおり。

「靈幻道士」(1985、原題 殭屍先生)
 「靈幻道士2 キョンシーの息子たち!」(1986、原題 殭屍先生續集之殭屍家族)
 「靈幻道士3 キョンシーの七不思議」(1987、原題 靈幻先生)
 「靈幻道士完結篇最後の靈戦」(1988、原題 殭屍叔叔)
 「靈幻道士5 ベビークョンシー対空飛ぶドラキュラ!」(1989、原題 一眉道人)
 「新・靈幻道士風水捜査篇」(1990、原題 驅魔警察)
 「靈幻道士6 史上最強のキョンシー登場!!」(1992、原題 音楽殭屍)
 「靈幻道士7 ラストアクションキョンシー」(1992、原題 新殭屍先生)
 「靈幻道士ザ・ムービー空飛ぶドラキュラリターンズ」(1993、原題 驅魔道長)
 「靈幻道士こちらキョンシー退治局」(2017、原題 救殭清道夫)
 「靈幻道士Q 大蛇道士の出現!」(2017、原題 新殭屍先生2)
 「靈幻道士X 最強妖怪キョンシー!」(2019、原題 至尊先生)

「靈幻道士XI 燃えよ!九叔道士の桃剣」(2021、原題 至尊先生之金蟬)
 「靈幻道士XII 英叔復活だヨ全員集合」(2021、原題 一眉先生)
 「靈幻道士XIII 鳳凰キョンシーの襲来」(2022、原題 僵尸山雀)
 〈関連作品〉

「殭屍至尊」(1991、原題同じ)
 「コイサンマン・キョンシーアフリカへ行く」(1991、原題 非洲和尚)
 「キョンシー」(第26回東京国際映画祭での邦題) または「リゴル・モルテイス/死後硬直」(シッチェス映画祭フアンタスティック・セレクション2014での邦題) (2013、原題 殭屍製作 清水隆)
 第1作の「靈幻道士」は1985年に製作され、2021年までに14作の(キョンシー・ホラー)が製作されている。さらに(キョンシー・ホラー)は台湾の「幽幻道士」シリーズをはじめ、(キョンシー・ホラー)の類似作品が各国で量産されている。実は、日本では「靈幻道士」というタイトルでシリーズ化して公開しているのだが、原題は「靈幻道士」ではないし、キョンシーが登場しても各々の作品はシリーズではないようなタイトルになっている。劇中に登場する(キョンシー)という呼称も日本に輸入・配給した東宝東和による命

名だった。

1985年製作の第1作「靈幻道士」のストーリーは以下のとおりだった。

『ある日、体術や法術を用いて人に害を及ぼす死体怪物(吸血ゾンビ)(キョンシー)を退治する道士カオは富豪のヤンから先代である父親の改葬を依頼された。墓地を掘り起こしてみると遺体は20年間も埋葬されていたにもかかわらず全く腐敗していなかった。ヤンの父親は生前に大きな恨みを買っており、風水的に誤った方法で埋葬されていたためにキョンシーになりかけていたのだ。カオは呪いが進行して危険な状態である遺体を引き取り、処置を施そうとするが弟子のミスによって遺体は完全にキョンシー化し、義荘(宗族の維持のために設けられた土地)から姿を消してしまった。その夜、ヤンはキョンシーとなった父親に襲われて殺害される。翌日、カオは現場捜査に訪れた保安隊長ウェイの勘違いで殺人容疑者として逮捕されてしまう…。』

「靈幻道士」は、1986(昭和61)年4月26日から全国の東宝系映画館で「デモンズ」の2本立てで公開された。福岡では福岡東宝で4月26日から6月27日まで上映された。「デモンズ」は1985年に製作されたイタリア映画で、閉鎖された映画館で悪魔と

謎の仮面男に招かれた人々が戦うホラーだった。

『大学生のシェリルは地下鉄で謎の仮面男からノストラダムスの墓を暴いた4人組がその呪いで次々と殺されるホラー映画の試写状を貰い、友人のキャシーと映画館に向かう。ロビーはたくさんの人であふれかえり、その中にいた黒人女性ローズマリーがロビーに飾つてある仮面を付けてふざけていると頬に傷を付けてしまう。ローズマリーは血が止まらなくなりトイレに駆け込むが傷はどんどん膨らんでいく。映画の中ではロビーに飾つてあった仮面と同じ仮面を付けた男がデモンズに変身し、次々と仲間達をナイフで刺し殺してしまふ。上映中ローズマリーの友人カルメンがトイレに様子を见に行くところ、ローズマリーは、すでにデモンズに変身していて鋭い牙と爪をむき出しにして襲い掛かる。そして、映画の進行と同時に場内では恐るべき惨劇がおこる。出口は塞がり閉じ込められた観客はひとり、またひとりとデモンズと化していく…。』

「デモンズ」とは、悪魔化した人間のなれの果てで、肌が青白く鋭い牙と爪が生えていて、知能はゾンビと大差ないが素早く動いて鋭利な爪で



人間に襲いかかる。一方、「靈幻道士」に登場する(キョンシー)は中国の死体怪物で、硬直した死体であるが長い年月を経ても腐乱することもなく動き回る。「靈幻道士」と「デモンズ」は、どちらも人間から奇怪化したゾンビのような生き物が登場するホラー映画だった。「靈幻道士」と「デモンズ」の2本立ては東西のホラーストーリーを堪能できたことだろう。

「靈幻道士」は4月26日から6月27日まで福岡東宝で上映された後、引き続き東映パラスで6月28日から7月11日まで上映された。「バタリアン」の2本立てだった。「バタリアン」は1985年に製作されたアメリカのホラー映画だった。1968年製作のゾンビ映画の原点となった「ナイト・オブ・ザ・リビングレッド」のパロディにしておどろおどろしいゾンビをコミカルに描いている。原題は「The Return of the Living Dead」だが、輸入・配給した東宝東和は「大隊」あるいは「大群」を意味する「バタリアン(Battalion)」を邦題にした。余談だが、この邦題をもとにおぼさんとバタリアンの混成語で、あつかましい中年女性を揶揄した(オバタリアン)という流行語が生まれた。次号に続く。

Ⅱ 図版は「靈幻道士」Ⅱ